

グッドプラクティショナー 紹介

推薦文

啓発チームをグッドプラクティショナーに推薦する理由

知多南部地域自立支援協議会精神障害者生活支援部会啓発チームでは、長年にわたり当事者の姿を伝える活動を行ってきました。精神障害に関する啓発活動が希少なうえに、当事者、家族、支援者等の多様な関係者がチームをつくって展開する活動は大変貴重で、強みでもあります。それらを通して、周囲への理解を広めるに留まらず、当事者・支援者・関係者が成熟してきた、チームでのエンパワメントをはかった例といえるでしょう。

最初は、小中学校の福祉教育教材に精神障害

の記載が皆無だったことから始まった活動は、試行錯誤を繰り返すなかで、点から線へ、線から面へと活動範囲と理解を広げてきました。

疾患教育の域を超えた地域共生社会実現に向けた活動であり、知多南部3町という一つのエリアを拠点としたこの活動は、全国的に注目できる取り組みであることから、啓発チームをグッドプラクティショナーに推薦させていただきます。

(推薦者：日本福祉大学社会福祉学部教授
保正友子)

〈グッドプラクティショナーについて〉

1 背景と目的

- ・よりよい実践を発掘・評価し、広く伝えることにより、よりよい実践が拡大することを目指す。
- ・よりよい実践を行っているソーシャルワーカーの仕事ぶりを紹介することによって、よりよい実践とは何か、よりよい実践のためには何が必要か、などについて読者に考えていただく契機を提供する。
- ・これにより、ソーシャルワーク学会として、理論の発展だけでなく実践の向上を、また、理論と実践の往復運動の促進を目指す。

2 方法

- ・推薦者から候補者名をあげていただき、その推薦理由(200~400字程度)を書いていただく。合わせて、候補者に執筆の承諾をとっていただく。
- ・候補者は学会員以外でも可能。執筆内容は「実践内容」。
- ・承諾を得られた候補者には、編集委員会から「私の実践：ー」といったタイトルで、実践内容を紹介していただくように依頼する(3,200字程度)。

私 の 実 践

精神障害に関する啓発実践 — 知多南部地域自立支援協議会 精神障害者地域生活部会啓発チームの実践 —

古川紀衣 (武豊わっぱる)

1. はじめに

知多南部3町(知多郡南知多町, 美浜町, 武豊町)では平成20年度に障害者自立支援法に基づき, 知多南部地域自立支援協議会が設置されました。21年度から, 暮らし部会精神障害者地域生活ワーキンググループとして, 22年度からは正式な精神障害者地域生活部会として設置され, その下部組織として「精神障害啓発チーム」が結成されました。

2. 啓発チームの誕生から活動展開

精神障害者地域生活部会(以下部会)では, 平成22年に「10年後にどんな地域になっているといいか」ということについて話し合い, そこから見えてきた①障害理解・啓発, ②情報周知, ③スキルアップの3つの課題について具体的な取り組みをしていこうと決めました。

愛知県では小中学校での福祉教育は「福祉実践教室」という名目で行われています。当時, 県から出ている福祉実践教室の冊子には精神障害の記載は全くありませんでした。知多南部3町に精神障害の啓発をする団体もなかったこともあり, 部会メンバーの中から, 当事者, 家族, 関係者で啓発チームを結成することになりました。また, 啓発チームで3町の福祉教育ハンドブック作成

のための精神障害の原稿づくりにも取り組みました。

自立支援協議会の部会, 福祉実践教室を担当する小中学校の教員を対象に実践をすることをはじめ, 中学生, 高校生, 大学生, 民生委員, ボランティア連絡協議会, 精神科病院の職員などいろいろな方たちを対象に実践を重ねてきました。

何を誰に伝えたいのか, どうしたら伝わるのかなど試行錯誤の連続でした。チームメンバーで検討を繰り返し, 目的としては, ①疾病教育(早期治療につなぐことと疾患への偏見を取り除くこと), ②地域で精神障害者が暮らしていることへの理解, ③違いを超えて共生できる社会をつくる市民の養成の3つに決めました。精神障害者を取り巻く地域課題は障害者だけの問題ではなく, みんなで共有すべき地域課題だという認識の下, 「理解して下さい, 助けてください」という訴えはしないこと, 学生さんたちには人生の先輩として出会ってもらふことなど, 啓発のスタイルを作ってきました。現在は, ①チーム紹介, ②語り(当事者, 家族, 関係者), ③対象者も参加してもらふシンポジウム, ④まとめという流れができ, 対象者によってテーマ内容を変更したり, 病気の説明を加えたりしながら, 啓発活動を行っています。

3. 啓発チームメンバーの感想

啓発実践のときは、個人としての参加を重視し、あえてチームメンバーの肩書を出さないの
で、本稿でもならう。

「個」としての多様性、啓発チームとしての「個」の存在の自在性、啓発する側とされる側の区別の不要性、障害者としての立場の消滅、人間性の芽生え、そしてチームとして互い同士の成長、大きな世界から小さな世界までの視点の幅広さの獲得、多角的観点の存在に対して自分の価値観の自在性の必要性、失敗と成功という考えにとらわれない活動、それに裏付けされた強さの獲得、そして当事者同士の向上的競争心、その他の多くの情熱、まだ残された沢山の空白を見付けていきたい。(中川一徳)

自分はいじめがトラウマだったし、孤立して、自分だけが障害で苦労していると思い込んでいた。主治医の言いなりで薬も出されるままに飲むだけで、一歩前に出ることができなかった。そんなときに当事者の先輩に誘われて啓発を始めた。たくさんの仲間に出会えて勉強になった。啓発を始めて、自分は大きく変わった。「発病しても一人じゃない。僕も変わったんだから、聴衆の中にいる子も変われると伝えたい。チームの中で自分が一番若いので、これからも学生にとって身近な存在として分かりやすく伝えていきたい。

(森 善浩)

私は大学で清掃の仕事をしています。私にとって啓発活動の目的は、精神障害者が皆さんの近くで働いているんだよ、ということを知ってもらうことです。学生さんの感想文に、「精神障害者の人が働いているとは思わなかった」というのもあり、精神障害者に対して見方を変えてもらえたのではないかとうれしくなります。最初は大勢の人の前で話することに抵抗感があったのですが、今では、私が話をしたい、啓発活動を続けていきたいと思っています。(座喜味徹)

啓発活動を始めて約5年になります。当初は体験談として原稿を読むだけで、何も伝えられま

せんでした。活動をしていくうちに、ただ伝えるだけではなく、何かを感じて考えてもらおうという気持ちに変わってきました。啓発活動をしていて一番変わったことは自分に向き合うことができたことです。当事者として自分にしかできないことに気づけたのも啓発活動です。(上野邦俊)

啓発の前はいつも心臓がバクバクする。舞台の中央へ行ってシンポジウムが始まると楽しくなる。仲間とのやりとりがおもしろい。ただこんな話で聴衆は納得できるのだろうか？伝わるのか？と心配になるし、胸の中にあるものを出すのはしんどい。自分との闘い。それでも聞いてくれている人の中に泣いている人がいると、感動してもらえた、自分の訴える力が強かったのかとも思うし、笑いができると聴衆に満足してもらえたと感じて自信になる。これまでやってきた積み重ねはすごいと思うし、啓発の輪が広がってきている。

(大岩裕明)

チームでの啓発は難しい。チームのメンバーを「仲間」と感じられるようになるまでは、相手の発言に敏感に反応してしまっていた。チームでやることを良さに変え、強みと感ずること。チームの仲間を肯定的に捉える発言を繰り返していると、自然と仲間意識が強くなっていった。

啓発実践を通して、チームの仲間たちは、そこに立っていることが力強くなってきた。いろいろなことを乗り越えてきた自分を語り、仲間の語りを聞き、そう、だから今があると、自分たちを信じる気持ちを強く感じる。啓発実践に参加し、一緒に信じる気持ちが強くなった。伝わっていくことを願って、続けていきたい。(久野英里子)

普段、勤務するグループホームでは、利用者さん以外に地域で生活している人と関わることが少ないが、啓発活動に参加する機会を得たことで、障害を抱えて地域で生活をする大変さや悩み等により気づくことができました。啓発活動は、当事者も支援者も一緒に事前打ち合わせや振り返りを行い、チームとして伝えたいメッセージは何なのかいつも考えることができます。啓発活動を通し、様々な人が地域で暮らしていることが当たり前な社会になるよう、また自身の成長のために

も、今後も粘り強く努力したいと思います。

(伊賀とも系)

啓発活動の必要を感じたのは、家族会で「子どもが病気になった時、親は何も知らなかった」と言う方がとても多かったからです。その時知識があればという悔いを持っています。チームメンバーの発言ははっとするようなことばかりです。毎日の家庭内での対応に苦慮している親にとってはヒントになることもあるのです。この数年で協力していただける方たちが増えたことや、メンバー一人一人が力をつけている場面にうれしくなります。仲間という意識が持っていると感じる場合があります。啓発実践の場で、中学生や高校生に、「この人たちの人生を感じ取ってほしい」と思うようになりました。(森 充代)

私たちの啓発は、ほとんど台本がなく、まさにライブです。チームの結束が強くなるにつれ何がおこっても動じなくなりました。時に緊張感が漂ったり、沈黙になったり、笑いがあつたり、皆でそのようなライブを楽しめるようになったと感じ

ています。このチームの一員であることをうれしく思っています。(大谷京子)

4. まとめ

精神障害啓発チームは一つの団体ではなく、当事者、家族、病院、福祉サービス事業所、保健センター、保健所、大学などのいろいろな機関がかかわっています。また、当事者の所属も様々です。結成当初は少しぎこちなかった関係も年数を重ね、お互いを理解し合えるものになってきました。シンポジウムのファシリテーターも、今は当事者の方が行っています。伝わったのか、うまくできなかったのではないかと悩むこと、自分をさらけ出すことに対する反動、実践してよかったと思えることもチーム全体で共有しながら進めてきました。啓発活動の効果が地域にとってどのくらいあるのかは分かりませんが、私たちチームメンバーは着実に成長しているのではないかと感じています。